淨土

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年九月廿日印刷納本　昭和二十一年十月一日發行

第十二卷　第五號

十月號

會員倍加運動に御協力願ひます

率直にお願ひいたします。過去十二年間「淨土」が全國の皆様の絶大な御愛護と御高評の下に、他宗の方々からさへも愛讀されて、教界に巨歩を印してきました事は誠に嬉しいことでございました。

然るに昨年の五月二十五日、事務所は遂に災火に見舞はれ、唯一の經濟的基礎であつた二萬餘の會員名簿をはじめ器具も在庫品も一切烏有に歸してしまひました。係員は鋭意その復舊に努力し八方苦心の末、漸く先般、復舊版として三月號を、續いて四月號を發行する事が出來ましたが、會員名簿燒失のため、皆様へ直接お送りする事が出來ず、止むを得ず配給會社の手によつて、全國の書店へ出した次第です。

然し會員の申込は僅少でした。續いて其後の發行により、漸次會員は增加してはゐますが、誠に寥寥たるものです。これでは經營の基礎がたちません。「淨土」のやうな特殊雜誌では、どうしても固定讀者を得ない事には、續刊は不可能ですしそれに現在では紙代も印刷代も、一切新圓でなくては駄目であります。配給會社からの賣上代金は封鎖小切手、銀行からは使用人の寡少のため諸經費の支拂ひを受けることが出來ません。從つて、どうしても新圓で拂込まれる振替や小爲替に賴らねば、毎月の會計が成立ちません。十二年の會員協力の輝しい歴史を有する「淨土」もこのまゝでは廢刊の偉目を見るより外ありません。然し道義地を拂つた現在の日本にこそ「淨土」に依る佛教宣布、淨土教の弘通は、最も緊急なものと思ひます。本誌が復興すれば、あの憂觀を誇つた二萬餘の會員も、漸次私達の手に歸つてくる事と存じます。起死回生の道は、一にかゝつて會員の熱烈な御援助に俟つより外ありません。苦しい中から、五月號を休刊しただけで、毎月發行をつゞけてゐますが、今後は更に精進して、總らゆる惡條件を克服し、より立派な雜誌を發行する覺悟です。どうか淨土宗唯一の社會的布教雜誌を復活せしめるため、是非この際會員になつて下さる事を、お願ひいたします。尙雜誌製作費の尨大な値上げ、郵税の改正等のため**一ケ年購讀料金二拾圓**（郵税共）に會費を訂正せざるを得なくなりましたが、何卒御諒承下さいまして御入會の上、一人が一人の會員獲得に御力添へ願ひたく、伏して懇願いたします。

法然上人鑽仰會

里見達雄
中村辨康
眞野正順

目次

表紙・カット：秋玲二
寺院と子供……（三）
東京女高師教授 牛島義友
金剛童子……（六）
吉田紘二郎

會員の頁

鑽仰隨想……（八）
伊藤菱雨
信仰は體驗……（九）
清田善苗
小說 のんきな女（ひと）……（一〇）
あらゐ・しけど

【信仰相談】
西方十萬億土とは……（一四）
中村辨康
編輯後記……（一六）

寺院と子供

東京女高師教授　牛島義友

公園や遊園地といふ近代的施設はなくとも、昔の子供達はお宮やお寺の庭で、樂しい一日をすごすことができた。赤子を背負つたお姉さんは年下の子供を相手にまりつきやかくれんぼをし、いたずら子達は木に登つたり、お堂の中にしのびこんだりし、叱られながらも愉快な時をもつことができた。時に子供好きの和尚さんが、まりつき仲間にでも入つてくれれば、良寛樣そのまゝの童心の世界、をさなごの天國が開かれてくる。このやうな幼き日の想ひ出こそ、子供に何よりもよい宗教的感化となるのではなからう、か。幼き日から結びつけられたお寺との關係、氏神さまとの結び付きは、後の日の信仰生活に深い影響をあたへると考へられる。

今日の日本の宗教界特に神道、佛教關係には敗戰による打撃が大きく、前途を悲觀し確信を失つた傾がみられるやうである。しかし、敗戰後の今日こそ世人は今までの現實主義、世俗主義から離れて、眞實の世界を求める氣持が最も強く、從つて宗教家が最も活動しなければならない時である。國難の日に聖僧が現れ、民族の危機の時に偉れた豫言者が現れた。今こそ民族的改心の時であり、宗教的信仰によらなければ日本の再建、新生は期待できない時である。政治がどうの、社會組織がどうのと言つても、決して新しい日本は育たない。政治家や教育者や勞働運動家の各員の中に、人を愛し、正しきを求め、神意の實現を祈る心がないかぎり、文化國家、民主日本の實現は考へられな

浮浪兒

秋玲二

い。

このためには社會人に對する布教傳道が必要であるが、同時に子供の宗教々育も極めて大切な問題である。子供の問題はとかく不急のことに考へられがちであるが、子供は直ぐに成長してしまふ。子供の時から正しい宗教教育をすることが、實は社會教化の一番の早道である。

併し今日は平時の宗教教育論をなすには餘りに事情がさしせまつてゐる。平時ならば子供が急に惡くなることもなからう。ところが現在の日本の子供は、道德的危機にさらされてをり最惡の條件下に放置されてゐる。闇の女の大半は二十歳以下の娘であつたり、青少年犯罪の激增、學童の賭博、集團的喫煙、家出浮浪兒等と敗戰の慘果は子供の生活の中に最も深刻に現はれてゐる。この狀態が尙數年續けば、國中の子供は不良兒になつてしまはないと誰が保證出來ようか。日本の再建は新しい世代に期待されるが、この次の世代の者が、昨日の子供より遙かに劣り、不良兒そろひであつたとしたら、も早日本は永遠に滅ぶるのではかならうか。

かかる意味から、子供の教育の再建こそ、日本再建の第一の課題であり、このために社會全體が深い關心を寄せる

ことが望ましい。とりわけ宗教界が最大の配慮をされることが必要である。

今日、日本の宗教は何をなすべきか等と迷つてゐる時ではない。先づこの日本の子供を不良化から防ぐことが重要な使命であらう。不良化防止などは學校や社會教育の課題であつて、宗教教育の使命ではないといふ人があるならば、この恐るべき不良化の傾向、道德生活の危機を無視して、どこに宗教教育があるのかと反問したい。

不良化防止の重要な方策として、校外生活の指導、健全な娯樂の奬勵が說かれ、最近は野球熱が子供の間に昂まり、對抗競技等も盛である。このために子供達の興味はたしかに惡い遊びから健全なものへと向いてきた。しかし單に興味の轉換だけでは、子供が健全になつたとは言へない。こゝにどうしても正しい道德性が養はれ、心から健全な性格が形成されなければならない。この爲に宗教教育の必要が痛切に感ぜられる。

この爲にお寺や教會はもつと積極的に子供に働きかけ、子供の生活をとらへなければならない。銚子の日蓮宗の廣野師はこの點にいち早く着目され、終戰後間もなき昨年の十一月に關係の寺院に呼びかけ、宗教教育の講習會を開かれたが、その着眼の鋭さと機敏さに敬服した。

今後寺院は日曜學校運動に全力を盡されることが望ましい。寺には子供が遊ぶのにもつてこいの廣い庭と建物があり、有志の青年を集めて指導者を作ることも容易であらう。キリスト教の教師たちは、あの施設と地盤があつたならば、いくらでも活躍出來るのにとうらやましく思つてゐるのに、大きな寺院程、子供の生活などに無關心にみへるのはどうしたことであらうか。

お寺と子供、和尙さんと子供達の結びつきを再び取戻すことが佛教新生のためにも必要であらう。

吉田絃二郎著
武藏野記　B6版　十三圓　二〇〇頁　送二圓
賣切れ中のところ、再版が出來ました。殘部僅少ですが、本會でも取次いたしますから、直ちに御申込下さい。
再版出來
發行所　東京・本郷區東片町一〇〇　船形書院
取次所　法然上人鑽仰會

金剛童子

吉田絃二郎

わたくしは三十餘年前に奈良に旅して、猿澤の池に沿うて上つた道のほとりで、古い金剛童子の御木像を一體手に入れることができた。高さ三寸ばかりのものである。

歸りに法隆寺の近くに住んでゐる友人を訪うて、例の金剛童子を見せたら、昔の傑作に擬して作り、時代を附けたものであらうといふことであつた。わたくしはそこで、

奈良の秋にせの佛も尊かり

といふ句をものして、法隆寺から京都へかへつて行つた。

かくて金剛童子の御木像は大正十二年の震災にも、今度の空襲にも無事でわたくしの書齋に、奈良の秋を聯想させつゝ今日に至つた。

數日前のことであつた。はじめてわたくしを訪ねて來た人が、つくづく金剛童子をながめてゐたが、その翌日、一顆の石を懷に入れてふたゝびわたくしを訪ねて來た。

「この石は法隆寺であつたか、藥師寺であつたかで拾つたものですが、神戸で空襲に遭つた時も、この石は助かつたのです」といつて客はその石の上に金剛童子を安置した。古佛を置くに寸分の隙も無駄もなく、蒼古たる色、深く刻まれた岩襞の妙はまるで金剛童子のために造化に依つて作られたかのやうに見えた。さつそく菊花を供へて禮拜したわけである。

それにしても因緣といふものはまことにおもしろい。奈良で見出して來た金剛童子が三十餘年にして、奈良の古刹の石を臺

坐として安置せられたのである。

人間も正しい姿で立つてゐさへすれば、いつかは安住すべき豪坐を惠まれるであらう。

中支から歸還して來た若い兵士の話。

支那人の取り引きを見てゐるとまことに不思議なくらゐ氣がながい。わづか一錢二錢をまけるまけないで長い時間かゝつて交渉をする。日本人には理解し難い。しかし實に感歎に堪へないことがある。それはなかなか容易に人を信頼しないが、いつたん信頼すれば最後まで、その人に背かないことである。

或る時日本の自動車隊が田舍道を走つてゐると路傍に支那の青年が苦しんでゐる。車を留めて抱き起こすと、しきりに腹痛を訴へる。藥を飲ませて、二日行程の基地まで運んでやつた。病氣も癒えた。

その日から青年は苦力として日本の自動車隊で働いたが、かれはかれに只一服の藥を飲ませてやつた某一等兵の恩義を感じそれからといふものは、いかに危險な場合にもかれは某一等兵の傍をはなれず生死を共にした。士は已れを知る者のために死すといふ古人の言葉を文字通りに實行したのである。恩義を弊履のごとく捨てゝかへり見ぬ現代の日本人に對して頂門の一針である。

數年前の話である。或る人が米國人を遊獵に誘つた。かれは若い米國人が山野を跋渉しつゝも、小ひさな痰壺を携へてゐるのを不審に思ひ、理由を問ふた。米國人の答はかうであつた。

「僕はかつて肺結核を病んだことがあり、目下なほ多少の保菌者だよ。万一菌を人に傳染させるやうなことがあつてはならないから」

この答を聞いた日本人は驚歎しないではをれなかつた。獵犬を驅り立てゝ鳥を追ふほどの健康な青年であるかれであり、場所は人も行かぬ山野である。しかも痰壺を携へて行くといふ公共道德觀念の強さに至つてはたゞ頭を垂れるのみである。

日本人でこの話を聽いて背に汗しない者が果して幾人あらう。文化日本も民主日本も宗教を忘れ、德義を忘れては空念佛に終る。

會員のページ

鑽仰隨想

伊藤菱雨
（仙臺市北四番町九五）

戰災後ひたすら行衛が案ぜられてゐた「淨土」が久しぶりに屆いた。そこには眞野師も、中村師もそして吉田紘二郎先生も、篤信の筆をつゞけてゐられるのである。わたくしは、四兒をつぎ〳〵喪つた運命の身を以て、ひとすぢに彌陀の誓願におすがりしてゐるのであるが、同じく四人のお子を失はれた御母君のその後の御消息を、その靈筆でお聞かせ下さつた吉田先生の『春の言葉』を手はじめに、次々と忽ちの間にむさぼり讀んだ。それは全く飢ゑたるものへの滋味であり、萎えたる夏草への喜雨でもあつたのである。

× × × ×

空襲のサイレンが全市に鳴りわたつた時の心のときめき、燒爆に變り果てた殘骸の街に佇んだあの悵然たる感じ、そのことすら次の瞬間には唱名一念、いつか平常心が取戻されてゐたのは、何といふありがたいことであつたらう。あんな時ですら、しかも爆音下の壕中にありながら、なほ一種のゆとりに似た氣持がたゞよふてゐて、格別慌て迷ふこともなかつたのは、偏へに彌陀如來の大いなる御力もさることながら、久しきに亘る我が「淨土」から頂いた法悅そのものであつたと、今更ながら感謝してゐる次第である。

× × × ×

終戰直後、教育の反省を中心題目とする中等學校長會議がさる學校で開催された。科學を振興せよとの聲が一番多かつた。折角の緊張感をくゞさせてはならぬとの意見も飛んだ。創意工夫だ、教育の實際化だ、と盛に叫ばれた。皆よいことだ、何一つうそではない。やゝもすると當座主義にのみ陷り易い教育界に、こんな意見のみが散在したとて別段不思議ではないが、忘れてならぬものを我々は忘れてゐるではないかと思はれたので、わたくしは從來の教育上の大缺陷として情操陶冶の閑却を指摘した。我が國の教育はあまりにも形式主義であり、場當り主義でなかつたか、國家百年の大計などゝ言ひながら何だかんだと教科書の注入を事として來たことも否めない。しかも戰時中は宗教を說き美を語る如きは反戰的だなどゝ見た向きさへあつたのである。思へばこれこそ何よりも恐るべきことではなかつたか。宗教を忘れた國民に、美をおきざりにしてゐる國民に、何事を期待されよう。しかもこれはたゞ教育界のみではなく、あらゆる社會の風潮ではなかつたかと思はれるのである。

× × ×

ともあれ「淨土」は寂光ゆたかに再生した。いかなる飢餓のふりかゝるとも、御すくひの妙なる限り、人類は永遠に歩みつづけてゆけるものと信ずる。同信の友にも同信ならざる友にも、惠みあれと祈念しつゝ合掌。

是非とも吉田先生の隨筆を

「淨土」第十二卷第三號、本日送附されました。並々ならぬ發行の苦心はお察し致します。吉田紘二郎先生の隨筆の讀めないことを淋しく思ひます。編輯上、もつと構想を練つて頂く事を切望いたします。（福岡縣朝倉郡比良松・淨福寺）

信仰は體驗

清田善苗
（熊本縣天草郡栖本村）

秋氣清く凌ぎ易い時節となりました。東京は相變らず食糧事情困難なる事と存じます。當地は田舍にて殊に農村地帶は本年豐作にて力强い感じがいたします。

さて貴社發行の「淨土」誌中、中村先生は淨土の有無につき明快なる答へを與へられ、實に有難く拜讀いたしました。昨日も愚妻が（前以て二三回くりかへし讀んでゐたらしいですが）少し暇にて煙草を吸ひながらぼんやり外を眺めてゐた私の目の前に「淨土」をつきだし、「こゝをすこし說明して下さい」と申し述べました。私は妻のかうした申出を大變喜び、熱心にしかも全力を捧げて、中村先生の文章をくだいて說いてやりました。說く私も熱心、聞く妻もサモ嬉しさうに、有難さうに「本當にさうですね」と聞きいつてゐました。私は妻のかうした信仰入門誠にさゝやかな努力ではありますが、それをこの上なく有難いことに感じました。

思へば三年前、五才になる長男を疫痢にて一晩のうちに失ひましたが、その悲しみを、その惱みを信仰にて解決せんと、命をかけて求めつゞけました。もつとも出家後、信仰は精一杯の努力で求めてゐましたが、求めて得られず、長い間、惱みつゞけました。ところが、長男を失つてから、宗教雜誌を見る眼が變り、殊に中村先生の淨土說明には心からうたれました。長い間求めてゐたものが、やうやく得られたのです。昨夜も死んだ長男の夢をみまして、目がさめた時は、ほのぼのと朝があけそめ、思はず先生の御高說を思ひうかべて、有難さに愚妻と心から語らひ、念佛を申しつゝ床をぬけでたやうな次第です。全く信仰は體驗だとしみじみ感じてをります。

なほ「淨土」について欲を言へば、小說じみたものは省いて信仰思想の分野を多分にとり入れ、紙不足の貴重なページを充分生かされたく存じます。

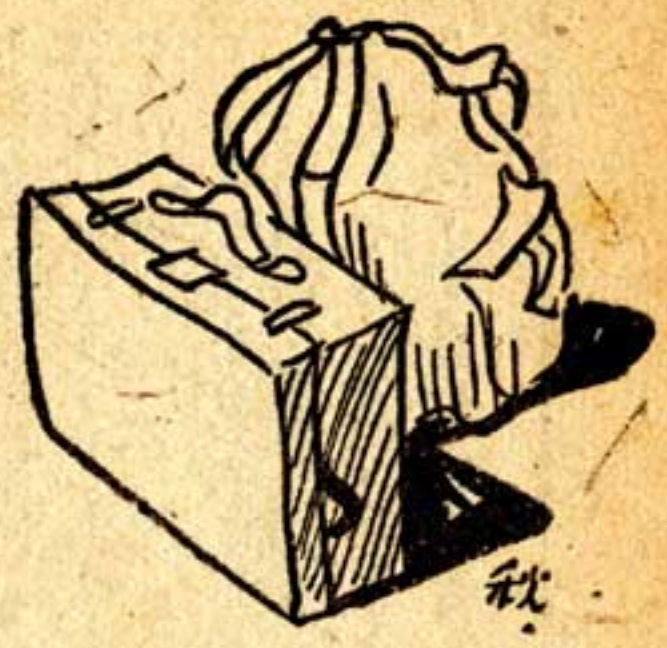
他に二三種、宗教雜誌を拜讀してゐますが、中村先生の講義ほど身にしみる文字はなく、どうか今後とも先生の御指導をお願ひ申上げますと共に、先生の御長命を心からお祈りいたしてをります。道は遠く難澁でせうが、根氣よく惱める人々をお救ひ下さい。

編輯室より

今號より「會員のページ」を設けました。會員諸兄姉の熱烈な御聲援に應へるため、編輯部は日夜想を練り、御滿足のできるみのある宗教雜誌、深みのある信仰雜誌の實現を念じてゐますが、人手の不足や經濟的事情などに災されて末だに低迷してゐます。しかし、中村先生の獻身的な活動、吉田紘二郎先生をはじめ有名な方々の熱烈な御後援などにより、惡條件にも拘らず、編輯子も氣を强くし、懸命に精魂を傾けて編輯に從事してゐます。必ず諸兄姉の御滿足を得る日も近い事と存じます。

それにしても、「淨土」は皆樣の雜誌です。人生の惱み、信仰の喜び、悲しみにつけ、嬉しきにつけ「淨土」はたえず皆樣のかたはらに、心の中に生きてゐなければなりません。編輯子の望むところは、この一點です。

數少いページの中を割いて、會員のページを設けた所以です。微衷をお察し下さいまして、御活用願ひます。なほ他に會員の原稿を募集しますが、十五頁の規定により投稿下さい。また、編輯について御希望がありましたら、御遠慮なくどしどし御申しこし下さい。



秋のんきな女

あらゐ・しげと

秋玲二ゐ

――のんきな女――

（一）

汽車は、關門の海底トンネルをくゞりぬけて、つひに北九州の工場地帶を走りはじめた。林立する煙突から吐きだされる黑煙りにもうもうとおゝはれたかつての空は、あとかたもなく、瓦礫と燒トタンの寒々しい燒野ケ原に、煙りを吐かない煙突が、ぽつんぽつんと淋しく立つてゐる。晴れわたつた冬空の清潔に澄みきつてゐるのが、なにか物足りなさを感じさせる。

美智子は、それでも、ほつとした。復員した夫のゐる目的地が、目近かにせまつたのである。東京からのながい旅であつた。身動きもとれない混雜と不潔な車內に、神經はいらだちとほしで、ぐつたり疲れきつてしまつてゐたのに、胸をしめつけてゐたしこりが、きふにとれて、すうつと心がひらけてくるのを感じた。

「さうさう、あの頃は若かつたわ……。」

ゆるやかに飛んでゆく車外の殺風景な眺めを、見るともなく見てゐた瞼に、新婚早々、はじめて九州へ足をふみいれた當時の印象が、ほのぼのと溫く想ひだされた。心は、いつしかうきうきと、愉しくふるへてゐた。無氣味な海底トンネル――あの頃はまだ計劃さへ公表されてゐなかつたが――ではなくして、新婚の旅にふさはしく、こさつぱりしたロマンチックな連絡船で、波の靜かな關門海峽をわたつた、愉しかつた狀景が、昨日の出來事のやうに、胸うち一ぱいに鮮やかにひろがつていくのだつた。始めて見る關門の山々を、夫の親切な說明にうつとりと耳をかたむけてゐたつけ、デッキにもたれて、山々の彼方に未來の輝やかしい希望を夢見てゐたつけ……。美智子は人しれず口もとをほころばした。

あれから十幾年の歲月が流れた。十一と九つの子供もゐる。が、夢見た希望は十分の一も實現されてゐない。それに想ひあたると、きびしい現實によびもどされ、冷たいものが心をおふのだつた。しかし。

美智子は强くそれをふりはらつた。

「だつて、だつて、働きざかりのいゝ年頃を、六年も七年も兵隊にと

られてゐたんですもの。」

心にいひきかせて、目をふせた。

「家は戰災を免れたし、子供はすくすくと成長したし、それに、それに、あの人は今無事に復員してきたんじやないの。これ以上の倖せがあるかしら……。これからだわ。」

心の片隅では、はげましてくれる聲さへする。汽車はいつしか海岸を走つてゐた。玄海灘の荒磯のよせる白い砂濱に、百年の風雨によぢまがつた逞しい松林が、どこまでもどこまでも生ひ茂つてゐる。

「待つてたあの人が、やつと歸つてきた。」

電報を手にした時から幾度くりかへしたかしれない言葉を、またくりかへした。長い月日だつた。歸るまでと、勤めはじめたのに、お役所ではいつの間にか、古顔になつてしまつた。が、希望は一瞬とも燃えることを、やめなかつた。夫の歸還はかたく信じて、疑はなかつた。離れてゐればゐるほど、長ければ長いだけ、愛情はいよいよ、清く美しく燃えさかつた。夫の歸還後の、豐かな溫かい生活の設計が、年中心を多彩な夢にみちてしめてゐた。戰地への便りにも、きまつてその夢がめんめんとつゞられた。そして最後には必ず、『歸つていらつしたら、今度こそ、いゝ奥さんになりますわ。ずいぶん我儘でしたけど、あなたのいゝ性格を、離れてはじめて理解したんですもの……。しよつ中、考へてゐることは、そのことだけ……。』と書きくはへるのを忘れなかつた。夫と元氣な二人の男の子を、こまやかな愛情で溫かくつゝみ、明るい充ちたりた生活をきづきあげていく、それが私の唯一の責任だわ、愉しい義務だわ、彼女は多忙な勤めのあひまに、夢見る若い女のやうに、美しい瞳を輝かせながら、うつとりと愉しいもの思ひにふけることも多かつたが、また、厳しい反省を自分の心に容赦なくこゝろみ、神經質な性格や、我まゝな行ひを、出來るだけ匡正しようと、精一杯の努力をした。そして、その努力が、あの人に滿足してもらへるやうな女になりたい、ひたむきな情熱に根ざしてゐることを想ふと、いひやうもない喜びが、こみあげてくるのだつた。かうまで想ひつゞける自分が、いじらしくてならなかつた。

汽車は博多驛を出た。もうすぐである。

「あの人は、どんな顔をして迎へてくれるかしら。でも、もしや弱りきつて……。」

うきうきした心に、淡い危惧の念が、ちらりとかすめた。じつとしてをれないほど、氣がいらいらしてきた。汽車の速力がきふに落ちたやうである。

（二）

支線の連絡が悪くて、夕方、やつとAといふ町に着いた。すぐ近くにT飛行場や軍需工場があつたのに、戰災には禍ひされず、もとのままの靜かな姿で、夕靄の中に沈まりかへつてゐた。近くにせまつてゐる山々は、忍びよる夕闇に、もう深い眠りをとらうとしてゐる。

昔のまゝの町は、なにか身うちを溫かくしてくれる。美智子は、興奮しきつた神經がしだいに沈まり、一歩一歩、落着いた足どりで、通

―の　な　き　ん　の　女―

りを歩いていつた。

夫は叔父の大きな寺に休息してゐた。通りからかなり奥まつてゐて、古風な門をくゞりぬけると、老松におゝはれた廣い庭に面して、大きな本堂と明るい近代的な庫裡があつた。玄關は暗かつた。それがやゝ淋しく感じられたが、美智子は、追ひかけられるやうに、小走りに玄關へ進んでいつた。

「今晩は。」

案内をこふと、女の子の聲がして、ぱつと燈りがついた。

ズボンをはき、リュックを背負つた姿が、ちよつと、恥しかつた。さういへば、髪をなでもしなかつたわ、思はずどぎまぎしながら、手を頭にかざした時、重いガラス戸があいた。

「あらつ！　東京のお姉さまつ！」

女の子は美智子を見ると、びつくりして挨拶もできず、ぱたぱた奥へかけこんだ。

「お母ちやま、東京のお姉さまよ。早くお兄さまに知らして……。」、奥の方で叫んでゐる聲が、かん高くひゞいてきた。

「待つてたんだわ……。」

美智子は胸の中があつくなつて、肩から力のぬけてゆくのを感じた。

「まあ、まあ、よく來てくれましたね。子供さんは？……。こんでとてもつれてこれません、さうでせうつて、でも、よくお留守してますわね、感心に……。さあ、さあ、おあがり下さい。龍雄さんが待つてますよ。」

叔母はいそいそと身廻りのものをとつてくれて、ひきあげるやうに招じいれた。

「やあ、しばらく……」

不意に、夢にも忘れなかつた元氣のいゝ、大きな聲がひゞいた。リュックや手さげを部屋の片隅にかたづけてゐた美智子は、はつとして瞳をあげた。ぞつとするほど頰のおちた土色の顏が瞼にやきついた。うすい頭髪は灰色にひかり、肩もげつそり落ちてゐる。瞬間、美智子は幻滅を感じた。期待してゐたすべてのものが、無殘にもこはれてゆくのを感じた。華やかにともしてゐた胸の光りは消えた。見あげる勇氣もなく、うなだれたまゝじいつと石のごとくかたくなつた。龍雄はなつかしげに、しげしげと見いつてゐたが、

「女の服裝もかはつたもんだね。まるで男みたいだ。いや、それほど内地の人はひどい苦勞をしたんだね……」

と、しんみり、いたはるやうに言つた。美智子は、ぎくりとした。暗い氣持の中に、それは一筋の光りとなつて激しくひらめいた。——可愛さうに、この人は、あのいまはしい戰ひに、弱りきつてしまつてゐる。言語に絶した苦勞をなめてきたんだわ——美智子はこみあげてくる熱いものを、やつとせきとめて、龍雄を見あげた。龍雄のきつい視線がゐすくめるやうに燃えてゐた。美智子はたじろいた。そして、そんざいな服裝を恥ぢらひながら視線をさけた。

「ほんとに長い間、ご苦勞さまでした。でも、元氣でお歸りになつて……」

あとはもうなんにも言へなかつた。叔母がゐなければ、ひしとだきしめて、弱りはてた肉體に、自分の燃える血潮のぬくみを、つたへたかつた。

「君こそ……。長い間よく留守をまつてくれた。感謝してゐるよ。有難う。ほんとに有難う。……子供は元氣だらうね？」

龍雄のやさしい言葉が、甘く甘く聞える。心がしびれるやうである。熱い涙で瞼がかすんできた。やつぱり待つてゐたかひがあつた。殺伐な戰野から、こんなやさしい氣持をいだいて、歸つてくる人があるかしら。弱々しい衰へはてた身體は、私のこまかい心やりで、きつと今にとりもどしてみせる。苦心して集めておいた食糧も役にたつ。また、愉しみができたわ。もとのからだになるまで、ゆつくり休養さしてあげなくちや。これが私の當面の任務だわ。愉しい義務だわ。……美智子は龍雄のやせこけた顏をやさしく眺めながら、心にくりかへした。龍雄はなにか言ひたげさうだが、人前をはゞかつてじつとこらへてゐる。それが妙にからだをこはばらせて、いぢらしいほど悄然とつゝ立つてゐる。

「やあ、しばらく。」

叔父が飄然とあらはれた。

「晩めしでもたべたら、早くふたりきりになるんだな。つもり話しもあるだらうから……」

叔父は理解があつた。息づまるやうな重くるしい空氣がとけて、美智子も龍雄もほつとした。そして、ふたりとも、早く二人きりになつて、思ふぞんぶん話したい、激しい衝動にかられていつた。

（つゞく）

信仰相談

西方十万億土とは！

擔當　中村辨康

（問） 浄土の存在が大分問題になつて居るやうですが、西方十万億土と云ふ言葉が存在を意味するやうに受取れます。その上浄土を「妙有の世界」とも云つたとすればやはり「有」の世界ではないかと疑はれませう。西方十万億土の意味を御教へ下さい。

（越前・KN生）

（答） 御尤もの御質ねです。佛教では東を出發點とし、南を途中とし、西を到着點とし、北を落着いた休息處と致します。それで發心（東）修行（南）菩提（西）涅槃（北）と配當して云つて居るのです。出發點は過去であり途中は現在であり到着點は未來であるから、浄土の配當に就ても東方浄土は阿閦佛の世界、南方浄土は觀音菩薩の世界、西方浄土は阿彌陀佛の世界とした譯です。即ち阿閦佛は過去の佛であり　觀音菩薩はまだ佛となられずに補處即ち後繼者としての菩薩であります。そして阿彌陀佛こそ一切を綜合（無量）する理想の世界にいます完全な佛であると考へたのであります。

宗教には何れも理想鄉を建てゝ居ります。その多くは上方か北方です。印度の婆羅門教、支那の道教、希臘教、アラビヤの宗教等皆な北方又は上方です。處が佛教では十方に浄土を認めて居りますから、それは直ちに無方を意味して實には方向を定めて居ないのと同樣ですが、然し特に因と果とを立ててある說明をする時、密教などで胎藏界（菩提の因）を東に配し、金剛界（成佛の果）を西に配して居るやうに、上方北方の休息處をさけてしかも南方下方は未完成處とし、東方は過去出發處とし、これ等の凡てを嫌つて、唯だ一つ西方をのみ理想的な方向として採用したのであります。

次に十萬億土とは十萬億の佛土と云ふことで、これは一佛土を三千大千世界とする時、その三千大千世界は一須彌山の世界を千倍し更に千倍し更に千倍した三千の大千即ち一萬億の世界のことですから、それを十方に考へる時十萬億の佛土と云ふことになるのであります。しかもそれを十方と云つてしまつたの

では無方に均しいことになりますから、理想的方向に十方佛土の全部を要約して「西方十萬億佛土」と云つたのであります。ですから此處に云ふ「西方」は十方を要約して云つて居るのであつて、西方があるから東方も上方もあるであらうと考へてはならないのであります。即ち何處を向いても理想的な方向たる西方なのであります。それ故西方十萬億佛土とは理想的な無量無數の佛土と云ふことであります。然かもその何れの佛土にも立ち勝つて居るのが阿彌陀の世界であるから「過十萬億土」と「過」の字を用ひて、凡ての國に超過して居ると云ふことを示して居るのであります。

それから「妙有」と云ふことですが、これは「眞空妙有」と熟字する言葉でありまして「眞空」と云ふ、「空」の意味が「存在」を否定する爲に兎もすれば「虚無」の如くに取られ易いから、特に私達が考へて居るやうな意味でないところの、即ち説明の出來ない「不可思議の存在」と云ふことを一應許して「妙有」と云つたのであります。謂ひ換ればは「存在觀を超越した言葉では云ひ現はせない存在」と云ふ意味であります。このやうに持つて廻つた言ひ方をして居るのが、印度佛教や支那佛教の癖でありますが、私達日本人にはピンと來ない點でもあります。それを日本流に「凡てのものは固定したものでなく（諸法無我）凡て變化するものであり生命そのものである諸行無常」と見るとき、眞空妙有とは「存在でないいのちの世界」と云ふことになつて、いのち即ち「進展あるのみ」と觀ずれば、そこには無我無執無苦無惱であるところの涅槃寂淨の世界即ち無量壽の世界を感得することが出來る譯であります。

即ち限りなきいのちの根元が阿彌陀佛であり、限りなきいのちの世界が阿彌陀の淨土であると見ることが出來るのであります。

さすれば「西方」と云ふことも「過十萬億佛土」と云ふことも、結局は方角でもなく距離でもなく「存在」を超越した「いのちの世界」を云ひ現はす爲の言葉の綾であり、印度的表現としての云ひ方であると云ふべきでもあります。

本誌の信仰相談欄は中村先生の懇切な解答により、毎號好評を博してをります。深い人生の惱みや、信仰上の疑問がありましたら、御質問下さい。必ず叮寧にお答へいたします。

讀者原稿募集

左の規定により、讀者の原稿を募集いたします。「淨土」は我々の雜誌だ、我々の手でよくする、といふ信念の下に、奮つて御投稿下さい。

一、信仰實話（四百字詰四枚以内）
御自分の體驗でも、知人の方の實話でも結構です。生活の中に生きた信仰實話を歡迎いたします。

一、地方の宗教行事（四百字詰二枚以内）
各地方には夫々獨特の宗教行事があることゝ思ひます。各地方の慣習に融合し、生活にうるほひを與へる、興味深い宗教行事を、御紹介下さい。

一、宗教味豊かな小説、童話（四百字詰五枚以内）
必ずしも創作に限りません。經典に取材したものでも結構です。讀者に溫かい宗教味を與へるものを希望します。

編輯後記

◇米の增配斷行、甘藷の氾濫で主食はどうにか確保したが、味噌醬油等の調味料の缺配で、臺所の惱みは相變らず解消されない。加へて魚は悉く闇に流れ、庶民階級の口には容易にはいらない。

◇新聞勞組のストライキは頓挫したが、放送協會は斷乎敢行し、續いて電產スト、先生達の最低賃金六百圓の要求等々、產別組合會議の所謂「十月攻勢」は果敢に展開し、吉田內閣の土臺を壯んにゆすぶつてゐる。

◇日銀券は遂に七百億を突破した。舊圓封鎖當時の三月よりはるかに膨張、石橋藏相の自信ある言明にもかゝはらずインフレに突入しつゝあることはまぎれもない事實である。

◇かゝる事態に直面して、敎家は如何なる態度をとるべきであらうか。相變らず殿堂にとぢこもり、法燈を社會の荒波の彼方に大事に護りぬくことだけで、事たれりとしていゝであらうか。西歐諸國の敎會の活動を想起し、動搖する社會に進出し、ゆるぎなき信念を與へるていの佛敎家の出現を僥望するのはあに私一人ではあるまい。

◇新聞界でも、頃日來壯に宗敎家の、特に佛敎徒の奮起を促す論說をかゝげてゐる。今こそ、佛敎徒の起つべきときである。惱み苦しむ人々に溫かき愛の手をさしのべ迷へる人々にゆるぎなき信念を與へ、そして敗戰の虛脫からおゝしく立上がらしむべきである。

◇出版界は日々に苦境におひこまれてゐる。用紙減產の聲に應じ、惡質商人のため紙の闇値は暴騰しせつかく組上つて校了になつても發行のできない書籍雜誌が、日毎に增加してゐる。

◇「淨土」も片々たる雜誌ではあるが、月々に發行してゆく事は、容易ならぬことである。しかし幸に紙も確保し、執筆者の絕大な援助と印刷所の並々ならぬ厚意によつて、月々確實に發行し得る見透しがついてゐる。佛天の加護とでもいふべきであらうか、み佛の慈悲をしみ〴〵感じる。

◇しかし、會員は漸增はしてゐるが、昔日にくらべると、幾何もない。經營の面に於ては、かなりの痛手である。どうか一人でも多く會員を勸誘していたゞき、昔の「淨土」に復活する機緣を作つていたゞきたい。まげて會員諸氏の御援助をお願ひする。

◇今號も亦御多忙の中にもかゝはらず、吉田先生の玉稿を頂くことができた。先生はいつも「淨土」の發行をお心にかけられ、記者がお願ひする前に「今度の締切りはいつですか」とお尋ねになるほど御熱心で、お訪ねする度に恐縮してゐる。

◇中村先生の筆陣は、號を追ふにつれ冴え、讀者の心を强くうつてゐるが、近頃は先生の文章で信仰を得た會員が急增し、毎日、感謝の手紙が事務所に殺到してゐる。

◇月毎に有緣の方々と連絡がとれ激勵の辭をよせられる方が多い。有難いことだ。(東)

淨土　十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和二十一年九月二十日印刷納本
昭和二十一年十月一日發行

東京都芝區芝公園淨土宗務所
編輯兼發行人　眞野正順

東京都芝區芝公園淨土宗務所
印刷人　村瀨秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二二
印刷所　大日本印刷株式會社
(東京一)

東京都神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

東京淨芝區芝公園淨土宗務所內
發行所　法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

購讀料一ヶ年　金二十圓
(送料共)
振替拂込みはすべて三十錢增のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十一年九月廿日印刷納本　昭和二十一年十月一日發行